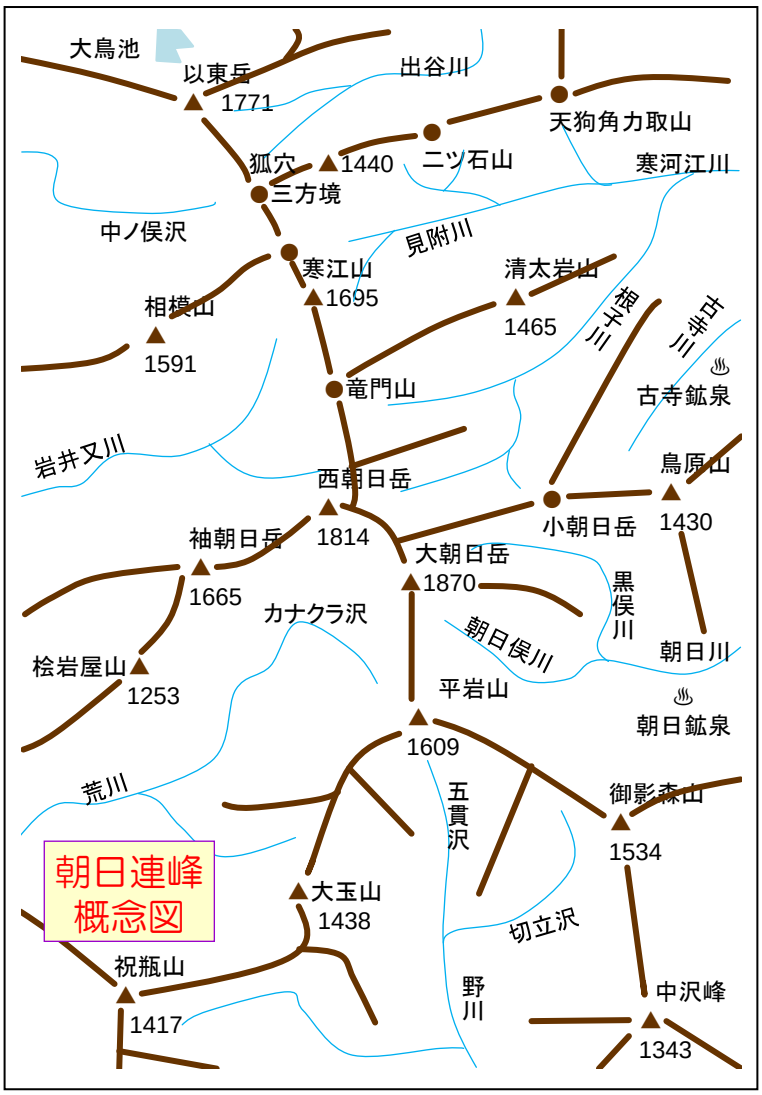
踏　み　跡　＜My　Mountains＞

東北	朝日連峰縦走	No.112



朝日連峰への夢は、昭和４１年８月の飯豊連峰縦走終了の時に始まった。もし相棒がいなければ単独行でもと思って密かに検討をしているうちに、鵜飼・吉野・阿部・太田とメンバーがそろってきた。ならば、ということで具体的な準備が始まったのが６月ごろだったか。計画半ばにして吉野が参加できなくなり、装備や食糧に変更を余儀なくされたが、なんとか山行計画はできあがった。

８月２日　　夜行で出発
８月３日　　長井から桑住平へ
８月４日　　桑住平から大朝日へ
８月５日　　大朝日から三方境へ
８月６日　　三方境から天狗角力取山、
　　大井沢を経て山形（夜行で）
８月７日　　早朝帰着

リーダー＝小林（装備担当）、サブリーダー＝鵜飼（食糧担当）、会計＝太田

男女混成パーティでの四日間の縦走は初めてのことでいくらか心配ではあったが、女性軍もさほど経験が浅いわけでもないし、とにかくやってみよう！　という感じでスタート。

荷物は小林・鵜飼は２０Kg、太田１６Kg、阿部１４Kg と割り振った。

朝日連峰は、磐梯朝日国立公園のほぼ中央部に位置し新潟県と山形県の県境になる。日本三大急流のひとつに数えられる最上川がこの朝日連峰から発していることも考えれば、たとえ２０００ｍに満たぬ山群とはいえ侮りがたい存在と言える。

蛇足だが、持ち込んだたった一台のカメラが旅の途中で故障してしまい、写真はほんのわずかしか残っていない。ほとんどの景色を瞼に焼き付けただけで帰ってきた。

昭和４３年８月２日　　＜出発　上野から夜行＞

上野駅、この季節のこの駅は例年のごとく混雑を極め、目標とするプラットホームに向かうことさえ難しい。急行出羽　２２時５６分発、満員ではあるがうまく席にありつくことができて、ホッと安堵のスタート。

昭和４３年８月３日　　＜長井→木地山ダム→桑住平＞

奥羽線に入り赤湯で下車。ここから長井線のディーゼルカーに乗り換えて、長井着６時１９分。

今日の昼食用にパン、トマト、リンゴを購入。さらに、ガソリンタンクがパンクして全部こぼれてしまったので買い直し。

駅前のいずみやタクシーで木地山ダムまで入ってもらうように交渉。ところが、管野で大雨による落橋がありこれより奥へは一般の車では入れないらしい。すると運ちゃんが管野から木地山ダムまで山形県のジープに乗せていただけるように手配してくれた。

長井駅を７時３０分出発。管野ダムで下車後工事中の箇所を歩いて渡り、そこからジープに乗せてもらい無事木地山ダム管理事務所に到着。ジープの運転手にお礼にハイライトをあげたら、「お茶でも飲んで行け」と事務所に招かれた。

ダムから湖水に沿ってしばらく進み、野川の流れに沿ってしばらく暑い道を歩く。都会の暮らしで鬱積

踏　み　跡　＜My　Mountains＞

した汚い汗を一杯流しながら歩くうちに、三角屋根の祝瓶山荘に到着。冷たい水が流れる無人の小屋の前で昼食。正三角形の祝瓶山が大きく立派に見える。ここはなかなか良いベースキャンプになりそうなところだ。
昼食の間に夕立ちをやり過ごし、さらに上流の桑住平を目指して出発。
桑住平は、その名に示すように桑の実をはじめとして木の実や草の実が豊富で、どこにでもは存在しないような素晴らしいテントサイトだ。水も結構うまいし、前途三日間の英気を養うにはもってこい。

祝瓶山荘前で昼食

昭和４３年８月４日　　＜桑住平→祝瓶山→桑住平＞
起床４時１０分、天気は霧雨。朝食をとり、６時４０分に出発。
赤鼻分岐まで登り、ザックをデポして祝瓶山を往復する。北の肩で針生平（はんなりたい）から登ってきてビバークしていたパーティと出会った後、頂上に到着。小雨と霧とで何も見えない。南には米沢盆地と飯豊、磐梯山が見えるはずだが残念この上なし。標高１４１７ｍにして頂上は無毛の砂礫帯になっている。これが高さだけでは評価できない東北地方の山の特徴だろう。
当初予定ではこの後大朝日岳まで行くことになっていたが、この天気で強行してもつまらないし疲労を招くばかりなので、今日はここまでとして再び桑住平に戻ることにする。明日はさらに食糧が減って軽くなったザックでいくらかでも楽に歩けるだろう。
桑住平に戻り、再び幕営。

昭和４３年８月５日　　＜桑住平→赤鼻分岐→大玉山→大朝日岳→金玉水＞
起床４時１５分、予想に反して天気は昨日とあまり変わらない。しいて言うなら、ほんの僅かだが水分が少ないという程度か。今日は荷物が軽いのと祝瓶山のピストンがないのとで昨日よりはるかに条件が良いので、多少の天気の悪さがあっても大朝日まで行ってしまおうということで一致。
出発６時３０分、赤鼻分岐までは昨日歩いた道なので全員足取りも軽い。
大玉山の登りに入るあたりで俄かに猛烈な雨。それもわずかな時間で上がり、その後に素晴らしい景観が目に入ってきた。谷間のガスが風に流れ始めて段々に稜線の鮮やかな緑が姿を見せ、さらに空にも青いものが広がってきた。
大玉山の直下あたりで、景色を楽しみながら一時間の昼食。昨日まではこの先の見通しが明るくはなかったが、段々に光明が差し入ってきた感じがする。
大朝日岳１５時３０分着、風が強くて寒いぐらいだ。まだ景色を堪能するほどには晴れ切ってはいない。
退屈まぎれに鵜飼とミツバチを捕まえて蜂蜜ナメ。想像以上に美味しい。
今日のテントサイトは西朝日側に下った鞍部、水の良い幕営地として有名な金玉水。
天気図を書きながら天幕設営。

昭和４３年８月６日　　＜金玉水→西朝日岳→三方境→狐穴←→以東岳＞
起床４時、天気は晴れ、６時３５分出発。朝一番から中岳と西朝日岳への登り。
西朝日岳は予想以上の大きさで、まだ目が覚めていない体にはいささかつらいものがある。
竜門山９時３０分、昼食。今日は晴れでことのほか眺めが良い。
寒江山から見る北寒江山、相模山への稜線の眺めはなかなかのものだ。草々の緑と残雪の白さ、そして褐色の崩壊。この尾根の連なりは、先月キレット越えの時に西穂から眺めた抜戸・笠への稜線と残雪の秩父平の景色にどことなく似ている。
三方境、その名の通り大井沢口の尾根と大鳥池、皿渕への尾根が分岐するところ。本日の幕営地の狐穴はもう目の前に近付いてきた。
と思っているところへ猛烈なスコール。全身ずぶぬれで狐穴までたどり着き、大急ぎで天幕張ろうとしたら

踏　み　跡　＜My　Mountains＞

止んでしまった。幕営が終了したところで時計を見るとちょうど正午。
軽い食事を取った後で空身で以東岳をピストン。以東岳は今回の縦走の中で、南端の祝瓶山とともに期待していた山である。
山行も四日目になるとさすがに男女の力の差は歴然としてくる。体力の差か根気の差かわからないが、わずかに空身の二時間ほどのピストンでももう前後の差が開いてくる。
小さな起伏を越えてゆるやかに登って、以東岳。
ガスで一番期待していた大鳥池が見えない。寒いのでヤッケを着てガスが切れるのを待ったが、ついにあきらめ。（右の写真：以東岳頂上）
緑が素晴らしいプロムナードのような尾根をのんびりのんびり歩き、狐穴のテントサイトに１６時帰着。
早いもので、明日はもう下山しなければならない。
今夜ぐらいはゆっくりしよう、ということになり
食事の後のんびりと歓談と唄。２０時４５分就寝。

昭和４３年８月７日　　＜狐穴→三方境→天狗角力取山→大井沢→間沢→山形（夜行列車）＞

起床４時、天気は快晴。昨晩遅くまで起きていたので眠い。
月山と鳥海山が目の前に見える。この景色が見たくて今日まで頑張ってきた。
出発６時３０分。三方境まで戻り、分岐点を東へ。日が高くなるにつれて気温が上がり、しかも高度を下げて行くので涼風が得られなくなっていく。暑さとの戦いが続く。
二ツ石を越え、天狗角力取山の下に天狗小屋。大きな雪渓と冷たい水。夏の１４００ｍで雪渓に出会うことができるのも東北の山ならではのこと。昼食と一時間の大休止。冷たい美味しい水をたっぷり飲んでこれからの長い下りに備えようという作戦。
竜ケ池から小尾根を北東にとり、海抜５７０ｍ付近で大井沢川の流れにたどり着き、なつかしきせせらぎを聞きながら一時間半ほどで寒河江川の畔、大井沢の中村という集落に到着。時は１５時。
いやはや暑い下りだった。間沢行のバスは１５時５３分、時間があるので河原で（この日のために用意した石鹸を出して）頭と顔と体の洗濯。
間沢から山形交通の電車で羽前高松へ、そして左沢線で山形へ。
山形は賑わっている。花笠踊りの雑踏をかき分けて食堂に飛び込み夕食。デラックスに鰻を食べて打ち上げ。
皆、特に女性二人はよく頑張った。前半は天候がすっきりせず先を心配したが、ここまでたどり着けた。
朝日連峰は良い山だ。やはり、飯豊と並び称せられる東北の名山のうちに入る。そして、その中でも以東岳は群を抜いている素晴らしさだ。
夏が短い東北の山が持つ厳しさと美しさがひとつになって、中部山岳では得られないものを得ることができたような気がする。
帰りも急行出羽、山形発２２時１４分。

昭和４３年８月８日　　＜（夜行列車）→上野駅＞

上野駅で解散。今日も休暇を取ってある私は余裕をもって帰宅。これから会社に行くメンバーは帰宅後朝風呂に入ってから出社とのこと。それぞれの思いを持って家路へ。

以上